

史跡 旧二条離宮（二条城）
平安京左京三条二坊一・八町跡
堀川御池遺跡発掘調査報告書

2022年

京都市文化市民局

史跡 旧二条離宮（二条城）
平安京左京三条二坊一・八町跡
堀川御池遺跡発掘調査報告書

2022年

京都市文化市民局



2区全景（南から）

例 言

- 1 本書は、京都市が京都市中京区二条通堀川西入二条城町541で実施した発掘調査の報告書である。調査は、旧二条離宮（二条城）の遺構（面）の確認を目的として実施した。
- 2 遺 跡 名 史跡 旧二条離宮（二条城）
平安京左京三条二坊一・八町跡
堀川御池遺跡
- 3 申請・許可 申請日 2021年3月22日
申請者 京都市長 門川大作
許可日 2021年5月21日
許可番号 3文庁第215号
文化財保護課番号 3N011
- 4 調査期間 2021年6月15日～2021年6月23日
- 5 調査面積 18㎡
- 6 調査担当者 家原 圭太
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 本書作成 京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課
- 12 備 考 調査は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に支援業務の委託を行った。また、写真の一部は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が撮影したものである。

目 次

1. 調査の経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査の方針	3
2. 遺 跡	4
(1) 遺跡の位置と環境	4
(2) 史跡旧二条離宮（二条城）指定地内の調査	5
(3) 今回調査近接地の調査	10
3. 遺 構	10
(1) 1区の調査	10
(2) 2区の調査	13
4. 遺 物	15
5. ま と め	15

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（南西から）
		2	1区全景（北東から）
		3	1区北半・土坑（東から）
図版2	遺構	1	2区全景（南西から）
		2	2区断割り部（南東から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：10,000）	1
図2	2区調査前全景（西から）	2
図3	1区作業風景（南西から）	2
図4	遺跡と調査位置図（1：5,000）	5
図5	周辺の調査（1：3,000）	6
図6	1区配置図（1：500）	11
図7	1区平面図（1：50）	11
図8	1区断面図（1：25）	12
図9	2区配置図（1：500）	13
図10	2区平面図（1：50）	14
図11	2区断面図（1：25）	14

表 目 次

表1	周辺の調査	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	15

史跡 旧二条離宮（二条城）

平安京左京三条二坊一・八町

堀川御池遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

今回の調査は、京都市中京区二条通堀川西入二条城町に所在する史跡旧二条離宮（二条城）における、舗装改良工事の試験施工に先立つ発掘調査である。

二条城は城内全域と四周の道路が史跡に指定されており、また、北西部は平安宮、北東部は冷然院などの遺跡が重複している。

これまでに城内で実施した調査では、弥生時代から近代に至る遺構を検出している。

今回の舗装改良工事の試験施工については、約9cmの掘削が必要な計画となっていた。二条城

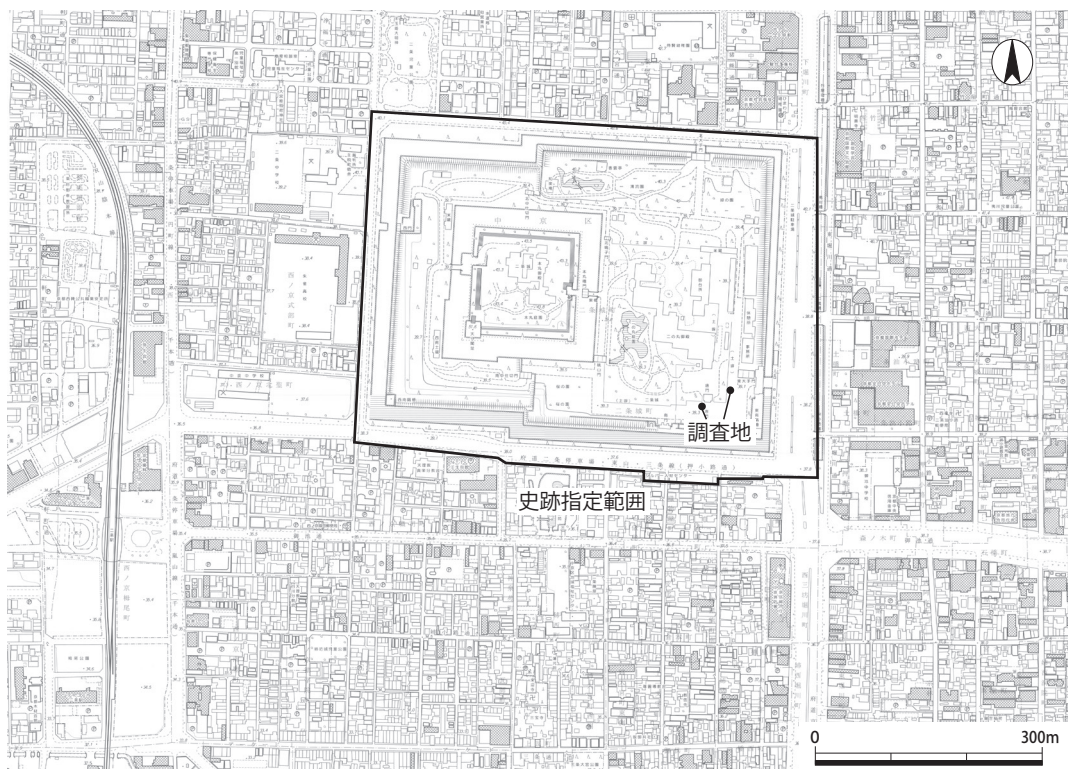


図1 調査位置図（1：10,000）

は、江戸時代の二条城期のあと、京都府庁を経て二条離宮となり、昭和14年（1939）に京都市へ下賜され、現在にいたることから、現地表面から非常に浅いところで、近世・近代の遺構面が残存していることが予想された。したがって、遺構面の深度および近世・近代の遺構の状況を確認するため、事前の発掘調査をおこなったものである。

令和3年3月22日に京都市長 門川大作から舗装改良工事試験施工および、それに先立つ発掘調査について文化財保護法第125条に基づく現状変更許可申請がなされ、令和3年5月21日付、3文庁第215号で文化庁長官の許可がおりた。

調査区は、試験施工予定地である東大手門の西側（1区）と唐門の南側（2区）に設定した。1区は、既設埋設管が多数存在することが想定されたことから、できる限り埋設管がなく、かつ試験施工範囲内におさまるよう設定した。2区は、既設埋設管は想定されなかったため、観覧者が滞留する唐門前をできる限り避け、かつ試験施工範囲内におさまるよう設定した。調査区はともに3×3mの9㎡（計18㎡）である。

調査は元離宮二条城事務所と文化財保護課の協議の結果、文化財保護課がおこなった。調査費用は、元離宮二条城事務所から文化財保護課へ執行委任をおこなった。また、調査にかかわる発掘調査支援業務を公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

調査開始前に元離宮二条城事務所により、表面の砂利撤去がおこなわれた。その後、令和3年6月15日から文化財保護課の調査を開始し、表土と盛土を重機で掘削したのち、人力で掘削と精査をおこなった。近代の遺構面の調査を進め、埋設管などの攪乱については部分的に掘り下げ土層の確認をおこなった。近代の遺構面は保存すべき対象となっているため、調査は1面調査とし、写真・図面の記録をとり、遺物を採集した。

調査成果について、6月17日に龍谷大学文学部教授の國下多美樹氏から指導をいただいた。また、6月22日には京都市元離宮二条城保存整備委員会記念物部会部会長の尼崎博正氏、文化庁文化財第二課（史跡部門）浅野啓介調査官から指導いただいた。

調査終了後は、元離宮二条城事務所と協議のうえ、人力で埋め戻しブレードで叩きしめをおこなった。残土は土嚢に詰め、現地に置き、表面の砂利復旧等は元離宮二条城事務所がおこなった。6月23日にすべての作業を終了した。

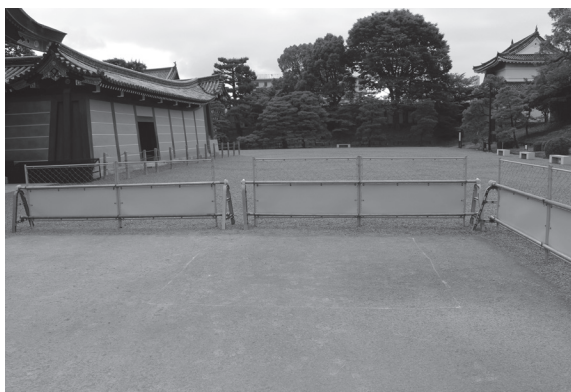


図2 2区調査前全景（西から）



図3 1区作業風景（南西から）

(2) 調査の方針

今回の発掘調査は、京都市『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』2020年の記述を基本的な方針として進めた。

京都市『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』令和2年3月（P.93～94）

第6章 保存

第1節 方向性

第5項 地下遺構の保存と発掘調査

地下遺構については、原則として二条城時代から離宮時代の遺構面を保存する。ただし、埋設管などのインフラ設備の更新などの本史跡を持続していくうえで必要とされる行為については、例えば離宮時代に設置された土管を塩化ビニール管に置き換えるなどの柔軟な措置をとる場合もあり得る。発掘調査は、史跡の「復旧（修理）を含む整備に必要とされる最小限の情報を得る」ことを基本とし、「史跡等の本質的価値を明確に把握し、本質的価値を構成する要素について保存と管理のあり方を検討する」ため、「公開・活用していくうえでの諸問題について多角的に分析する」ための調査も含むものとする。

調査範囲に関しては「極力限定するとともに、発掘調査により遺跡が受ける影響を十分勘案しつつ、最も適切な調査手法を選択する」。調査の範囲と手法の決定に当たっては、運営体制内での合意をもって、文化庁並びに京都市元離宮二条城保存整備委員会との協議を踏まえる。二条城時代の地下遺構が攪乱を受けるなどして既に失われており、同時代より前の地下遺構が検出された場合、その取り扱いについては文化庁並びに京都市元離宮二条城保存整備委員会との協議を踏まえて決定する。

上記の方針にしたがい、本調査では、近代の遺構面を保存の対象とし、それより下層の調査は遺構面保存の観点から原則的におこなわないこととした。ただし、攪乱などにより近代の遺構面が残存していない場所については、遺構面の詳細な情報収集および、断面観察による層厚や下層の堆積状況の確認を目的とした断割り調査をおこなった。

また、近代の遺構面とみられる場所であっても、表面の確認だけでは時期の特定が困難であることから、文化庁と協議のうえ、部分的な断割り調査をおこなった。

2. 遺跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地の堀川御池遺跡、平安京跡及び史跡旧二条離宮（二条城）に該当する。

堀川御池遺跡 堀川御池遺跡は北は二条通、東は油小路通、南は姉小路通、西は大宮通付近に広がる縄文から古墳時代の集落跡である。縄文時代から古墳時代の流路・溝などがみつまっている。二条城では二之丸御殿より南東部がこの遺跡に含まれており、今回の調査区は当該遺跡の北半部に位置する。

平安京跡 1区は平安京左京三条二坊八町の西端部、2区は左京三条二坊一町の南東部に位置する。

平安京左京三条二坊八町は、宮内省所管の木工寮が所在した（『拾芥抄』）。木工寮は宮城の造作及び修理を担当する官衙である。貞観17（875）年5月12日に火災があったことが『日本三代実録』にみられる¹⁾。

平安京左京三条二坊一町については、二町とともに平安時代前期は木工寮の厨町である木工町が所在した（『拾芥抄』）。木工町は承和9（842）年7月19日に火災にあったことが『続日本後紀』にみられる。平安時代末期になると、検非違使である源資成と府生兼康の宅地が所在した。これらの宅地は、安元3年（1177）の火災（太郎焼亡）により焼失している。

史跡旧二条離宮（二条城）²⁾

二条城は慶長6年（1601）に徳川家康により計画された城郭である。堀や石垣等の普請は諸大名に命じられた。慶長8年（1603）には二条城は一定程度完成し、同年3月に徳川家康が入城した。その後、徳川家康が上洛する際には、伏見城に次ぐ拠点として利用され、特に参内や公家などとの諸礼のための屋敷としての性格を有していた。このときの二条城は、現在の二之丸を中心とした東半のみであり、昭和55年度におこなわれた立会調査で当時の西堀とみられる石垣が検出されている³⁾。

寛永元年（1624）には、寛永3年（1626）の後水尾天皇行幸のための二条城改造が計画された。この改造により、城域が西へ拡張され、拡張部分に本丸が新造された。本丸の南西部に伏見城から移築されたといわれる天守が造営された。また、行幸時の女院御所とみられる遺構が現在の桜の園における発掘調査でみつまっている⁴⁾。

後水尾天皇の行幸は寛永3年（1626）9月6日におこなわれたが、その後、多くの施設が他所へと移築された。寛永年間以降、二条城が利用されることは減り、幕末まで維持管理がされる。その間、災害に見舞われることが多数あり、特に寛延3年（1750）には落雷により天守が焼失し、天明8年（1788）の大火では本丸が焼失した。

幕末になると、再び二条城が利用され、14代将軍徳川家茂が上洛した際に二条城に入る。その

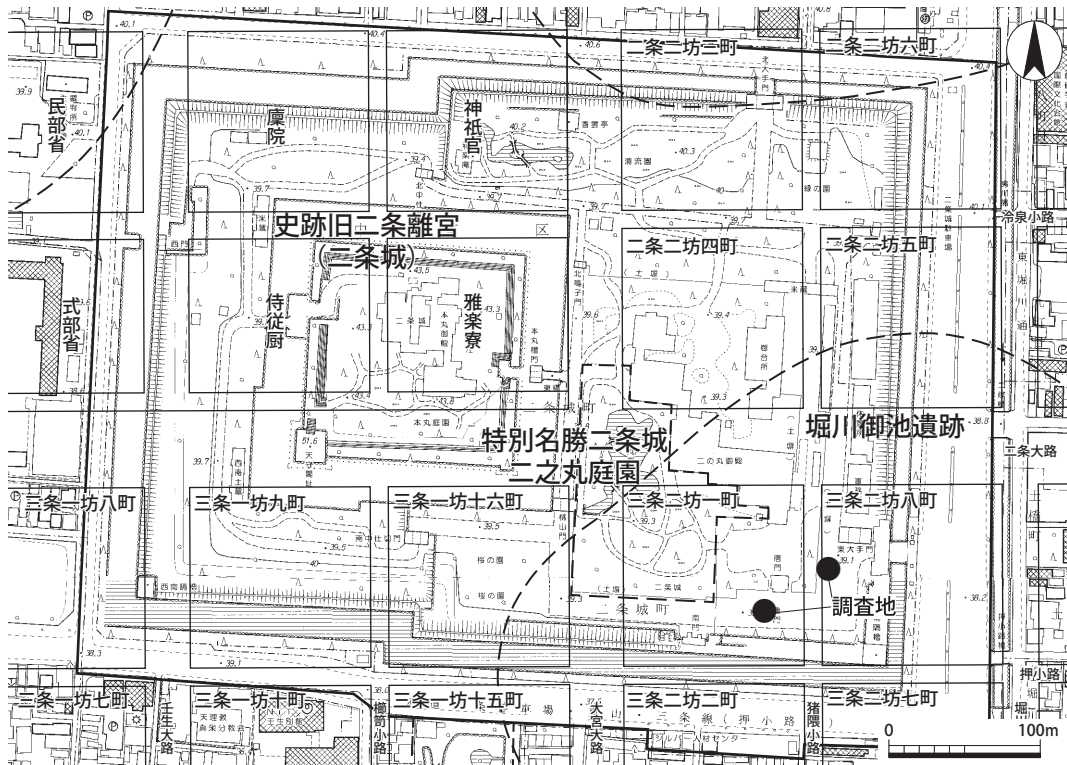


図4 遺跡と調査位置図 (1 : 5,000)

後、家茂の跡を継いだ徳川慶喜は、慶応3年（1866）二条城二之丸御殿大広間において大政奉還を決定した。

明治3年（1870）には二条城は留守官の管轄となり、翌4年（1871）には元京都守護職上屋敷跡地におかれていた京都府庁が二条城に移転した。明治18年（1885）に再び上屋敷跡地へ移転するまで14年間、府政の中核施設として利用された。

明治17年（1884）、二条城は「二条離宮」と名称を改められ、宮内省管轄となった。明治18年（1885）に府庁が移転して以降、離宮としての改修が進められた。

大正4年（1915）、大正大礼にあわせて二之丸に大饗宴場が建設された。

昭和14年（1939）、離宮が廃止され、京都市に下賜された。

（2）史跡旧二条離宮（二条城）指定地内の調査

史跡旧二条離宮（二条城）指定地内では、昭和48年の調査を先駆けとしてこれまでに30次にわたる調査をおこなっている。ここでは特に顕著な調査と、今回の調査にかかわる部分を抽出し、まとめる。

奈良時代以前 縄文から古墳時代の集落遺跡である堀川御池遺跡にかかわる遺構を確認している。縄文時代の流路、弥生時代の溝、古墳時代の溝を地下鉄東西線の調査（調査番号11）で確認している。また、緑の園（調査番号15）では弥生時代の竪穴建物を検出しているが、この場所は堀川御池遺跡と縄文から弥生時代の集落遺跡である二条城北遺跡の間に位置することから弥生時代の集落としては両遺跡にまたがっていた可能性がある。

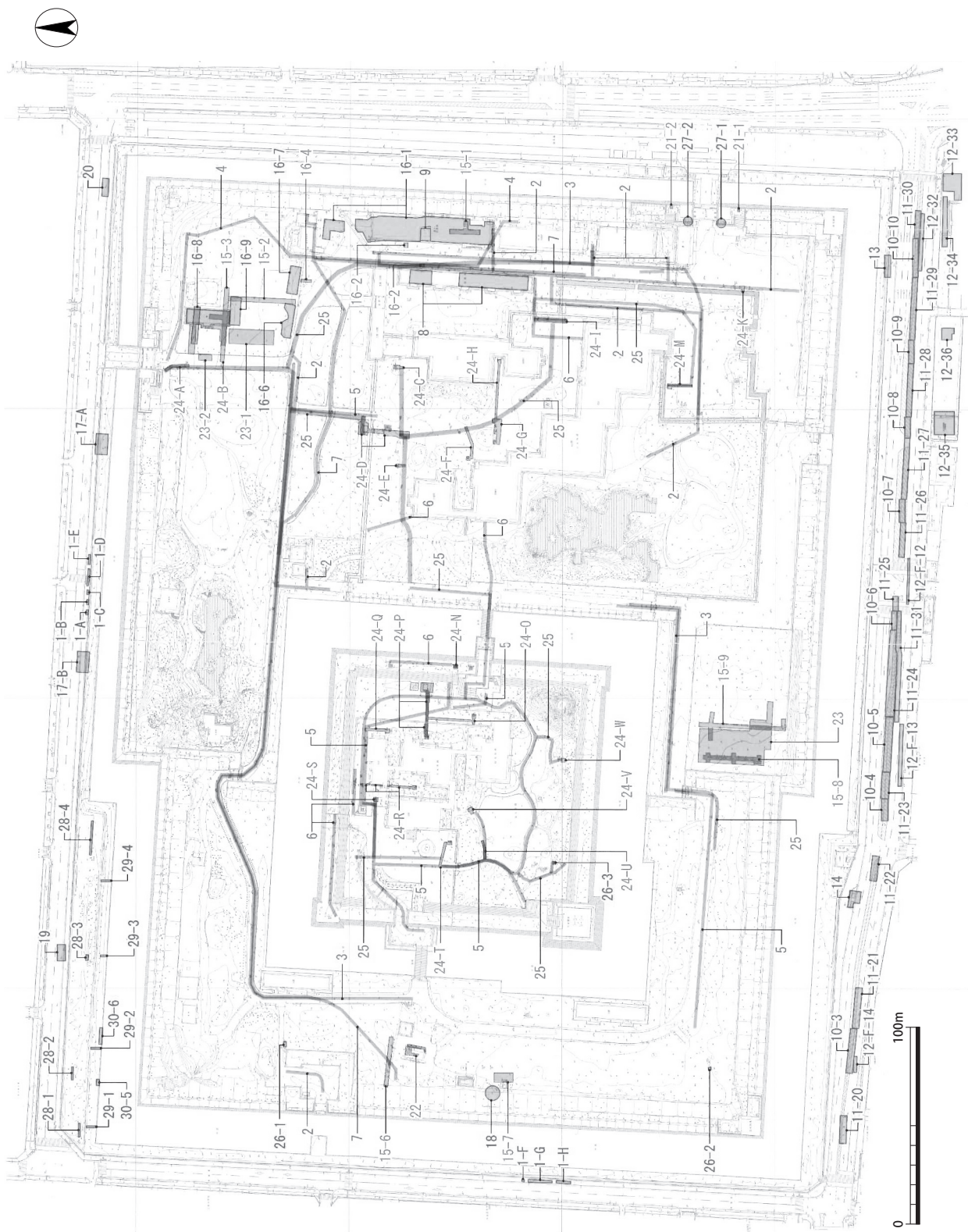


図5 周辺の調査 (1 : 3,000)

表1 周辺の調査

調査番号	調査箇所	検出遺構等概要	実施年度	調査区分	調査報告
1	二之丸北外堀周辺	平安時代：平安宮東、南限の濠 江戸時代：溝、金箔瓦	昭和48年	発掘	1
2	二之丸御殿周辺	江戸時代：遺物包含層	昭和51年	立会	2
3	二之丸御殿周辺 本丸北	顕著な遺構なし	昭和52年	立会	3
4	二之丸北東	平安時代後期、末期～鎌倉時代：土坑 江戸時代：石組暗渠	昭和53年	立会	4
5	本丸御殿 二之丸北	江戸時代：瓦溜、縁石列、礎石、石組溝	昭和54年	立会	5
6	本丸御殿北・東 二之丸御殿周辺		昭和55年	立会	6
7	本丸北 二之丸周辺	平安時代後期・中世：土坑 江戸時代：石垣3条、排水溝、焼土層	昭和55年	立会	6
8	二之丸東 (模写室)	縄文時代晩期：流路 平安時代後期：溝、土坑 平安時代後期～室町時代：柱穴等 二条城創建期：道路敷 寛永：倉	昭和56年	発掘	7
9	二之丸東 (収蔵庫)	鎌倉～室町時代：南北溝、柱穴 桃山～江戸時代：土坑、石組井戸、柱穴等	昭和57年	発掘	8
10	南外堀南 (押小路通)	平安時代：押小路、壬生大路関連遺構、神泉苑園池等 江戸時代：路面、柵	平成2年	発掘	9
11	南外堀南 (押小路通)	平安時代：神泉苑園池、舟着場 江戸時代：押小路等	平成3年	発掘	10
12	南外堀南 (押小路通)	平安時代：築地塀（神泉苑）、溝、大宮大路関連遺構、掘立柱建物 室町時代：土坑、井戸 江戸時代：押小路通	平成4年	発掘	11
13	南外堀南 (押小路通)	平安時代：柱穴等 江戸時代：押小路通	平成4年	発掘	11
14	南外堀南 (押小路通)	江戸時代：押小路通	平成5年	発掘	12
15	本丸周辺 二之丸周辺	平安時代：冷泉院園池関連遺構（1～3区） 室町時代：整地層、井戸、溝 江戸時代：御馬小屋（1区）、番頭屋敷・番屋敷（2・3区）、石垣（8区）	平成12年	試掘	13
16	二之丸北東	平安時代：冷泉院園池関連遺構 鎌倉～室町時代：池、柱穴 江戸時代：番頭屋敷・番屋敷関連遺構	平成13年	発掘・試掘	13
17	二之丸北外堀周辺	平安時代：柱穴 鎌倉～桃山時代：溝、井戸 江戸時代：路面、柵	平成14年	発掘	14
18	本丸御殿東	平安時代：柱穴 室町時代：落ち込み、溝 江戸時代：土坑、整地層	平成14年	発掘	15
19	二之丸北外堀周辺	江戸時代：路面、柱穴	平成16年	発掘	16
20	二之丸北外堀周辺	平安時代：柱穴、土坑 鎌倉～桃山時代：柱穴、土坑 江戸時代：路面、落ち込み、柵	平成17年	発掘	17
21	東大手門周辺	江戸時代：石垣、石柱	平成19年	確認	18
22	本丸西側	江戸時代：礎石	平成19年	試掘	19
23	本丸南（桜の園） 二之丸北東（緑の園）	江戸時代：溝、礎石列、土坑等	平成21年	確認	20
24	本丸周辺 二之丸周辺	平安時代：池 鎌倉～桃山時代：池 江戸時代：礎石建物、路面、木樋、石列、土坑、集石等	平成21年	確認	21
25	本丸周辺 二之丸周辺	江戸時代：礎石建物、瓦溜り等	平成22年	立会	22
26	本丸周辺	江戸時代：路面、瓦溜り	平成22年	発掘	23
27	東大手門周辺	近代以降：石柱	平成26年	発掘	24
28	本丸北	平安時代：宮内道路等 鎌倉～室町時代：土坑、溝等 江戸時代：整地層 近現代：路面	平成27年	発掘	25
29	本丸北	江戸時代：石垣裏込	平成28年	発掘	25
30	本丸北	江戸時代：石垣裏込	平成28年	発掘	25

周辺調査参考文献

- 1 京都市文化観光局文化財保護課『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1973- I』1975年
- 2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2008年
- 3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011年
- 4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011年
- 5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2012年
- 6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011年
- 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1983年
- 8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1982年
- 9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994年
- 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1995年
- 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1995年
- 12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年
- 13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-15, 2003年
- 14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-12, 2002年
- 15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-13, 2002年
- 16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）・平安京廩院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-13, 2005年
- 17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2005-16, 2006年
- 18 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成19年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2010年
- 19 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』2008年
- 20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2009-14, 2010年
- 21 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2009-15, 2010年
- 22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）防災施設工事に伴う二条城内詳細分布調査終了報告書』2010年
- 23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-12, 2010年
- 24 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市元離宮二条城東大手門保存修理工事に伴う埋蔵文化財発掘調査終了報告書』2014年
- 25 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2016-19, 2019年

平安時代 二条城北西部は平安宮が位置し、平安宮東限と南限にかかわる遺構を二条城外周（調査番号1）で検出している。ただし、二条城北西部に想定される廩院、神祇官、侍従厨、雅楽寮など宮内官衙にかかわる遺構は検出されていない。

平安京にかかわる遺構は、条坊道路、神泉苑、冷泉院などがある。条坊道路関連遺構は、地下鉄東西線にかかわる調査（調査番号10・11・12）で、壬生大路、大宮大路、猪熊小路を検出している。

神泉苑は平安京左京三条一坊九～十六町に所在した。このうち九・十六町と十・十五町の一部が本史跡指定地内に該当する。地下鉄東西線にかかわる調査（調査番号10・11・12）で、神泉苑の園池や、船着場とみられる木材が見つかった。また、緑釉瓦や「神泉苑」銘瓦などが出土し、現在、地下鉄東西線二条城前駅に展示されている。

冷泉院は平安京左京二条二坊三～五町に所在した、平安時代前半に嵯峨天皇や淳和天皇が居住した御所である。緑の園および展示収蔵館（調査番号15・16）の発掘調査で園池の景石、遣水を検出した。

中世 本丸西側（調査番号15）で室町時代の土坑や溝を検出した。また、展示収蔵館や第2駐車場（調査番号16・28）では、鎌倉時代から室町時代の池や井戸、土坑、溝を検出した。

近世（慶長） 調査番号7で石垣2条を検出した。石垣間距離は約13mであることから、寛永期に拡張する前の西堀と考えられる。

桜の園（調査番号23）では、慶長期西堀内側に接して積み上げられた土塁内側に構築された石垣を検出した。また、模写室建設に伴う発掘調査（調査番号8）で慶長期の道路敷と側溝、柵などを検出している。

近世（寛永） 模写室建設に伴う調査（調査番号8）で寛永期の米倉を検出した。また、本丸西橋西側の調査（調査番号22）では寛永期の礎石と溝状遺構を検出した。

桜の園（調査番号23）では、寛永期の盛土や礎石、溝などを検出した。盛土は約50～110cmの厚さがあり、二条城行幸に備えておこなわれた寛永期の大規模な増改築に伴うものである。礎石などは寛永3年（1626）におこなわれた後水尾天皇の行幸御殿（女院御所）のものである。

本丸の調査（調査番号24）で礎石を検出した。寛永期の本丸御殿の礎石であることが『行幸御殿并古御建物取解不相成以前 二條御城中絵図』からわかる。

管理事務所西側の調査で御馬屋にかかわる石列を、本丸東橋東側の調査で橋廊下の石列を、本丸の調査で御土蔵の石列を検出した（調査番号25）。

このような知見から寛永期の建物に伴う礎石は、多くが撤去されずにそのまま埋め戻され、後世の攪乱がなければ、城内に残存しているとみられる。

(3) 今回調査近接地の調査

1区近接地 平成21年度に防災設備工事に伴う発掘調査(24次K区)では、約10cmの厚さの路面砂利・盛土の下層に、約10cmの厚さの江戸時代中期から後期の整地層である礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥を検出した。この整地層は堅く締まっており、路面又は路盤の可能性もある。また、この遺構面で、土坑3基を検出した。さらに下層には江戸時代前期と中期の整地層がみついている。江戸時代前期の整地層は堅く締まっており、上面に1～10cmの礫や瓦片を敷き詰めることから二之丸造営に伴う整地面もしくは路面と考えられている⁵⁾。

2区近接地 平成29年に唐門南西部で説明板設置に伴う立会調査では、GL-15cmで時期不明の旧地表面、-20cm以下平安時代の土師器を含む整地層、-50cm以下褐色泥砂の地山を確認している。

3. 遺構

(1) 1区の調査

1区は、番所南西に設定した調査区である。二条城の正面である東大手門を入れて正面南寄りに位置する。当該地を含む二之丸東半部は近代以降現代に至るまで便益のための諸施設が置かれた。調査区部分は、絵図などから建物等が置かれたかは不明だが、電気線などが埋設されていることが想定された。調査区設定にあたり、埋設管敷設にかかわる図面を参照し、遺構面が残存している可能性が高い場所を選択するとともに、現代に敷設された埋設管部分を断ち割り調査することを想定し、調査をおこなった。

基本層序 現代整地層(1・2・5・7層)、近代整地層(10層)、近世整地層(11層)である。

現代整地層は、現代の砂利舗装で3層に大別できる。1・2層は、平成30年に行われた電気工事後、7層は昭和39年電気工事後の砂利舗装である。5層は2層と7層の間の砂利舗装であることから昭和39年から平成30年までの間に施工されたとみられる。砂利舗装はそれぞれ厚さ約5cmである。

近代整地層は、現代整地層直下にあり、厚さ約10cmである。調査区全体に現代攪乱が多く、この整地層は調査区北半の一部にのみ残存する。

近世整地層は、近代整地層の下層で検出し、厚さ約30cmまで確認したが、さらに下層につづく。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
近世	整地層(1・2区)	
近代	土坑1・2(1区) 整地層(舗装路盤:2区)	

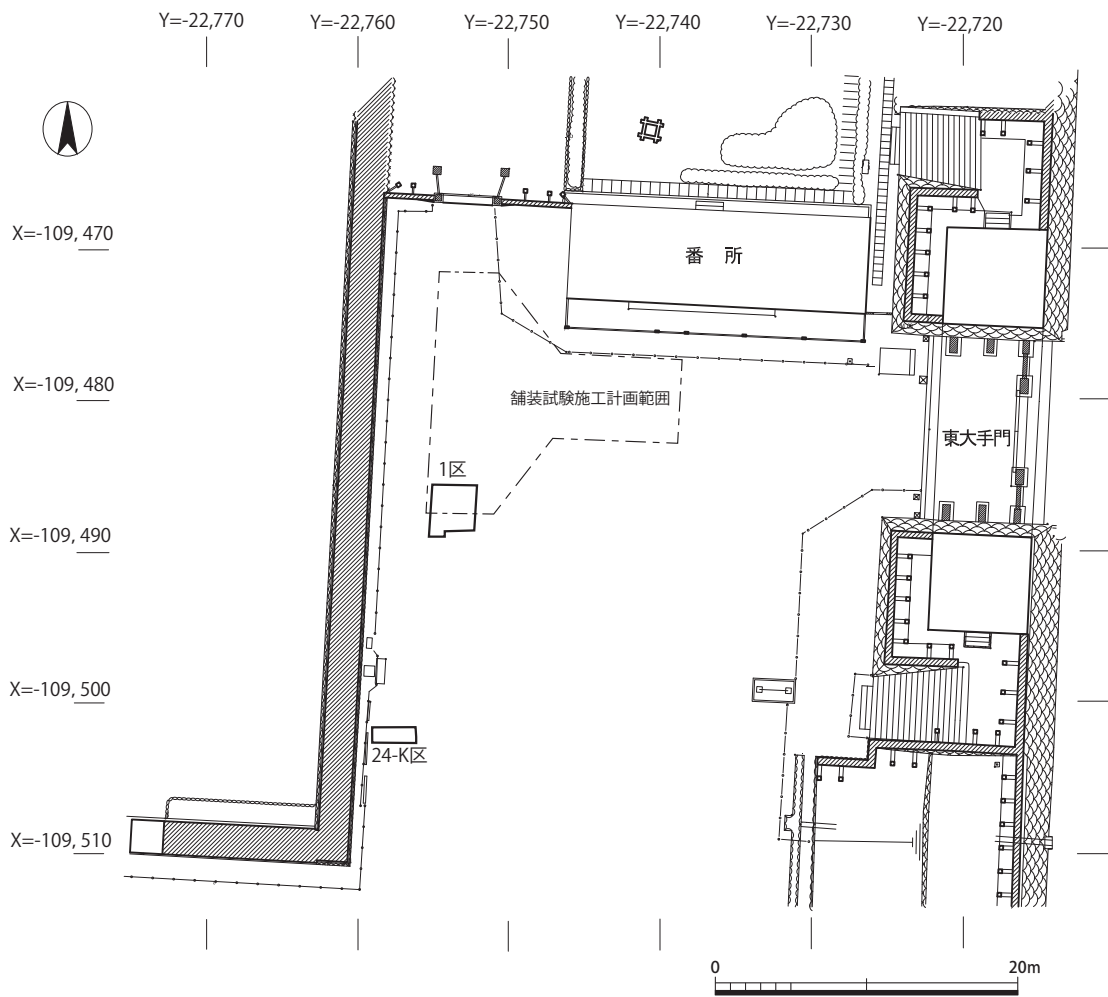


図6 1区配置図 (1 : 500)

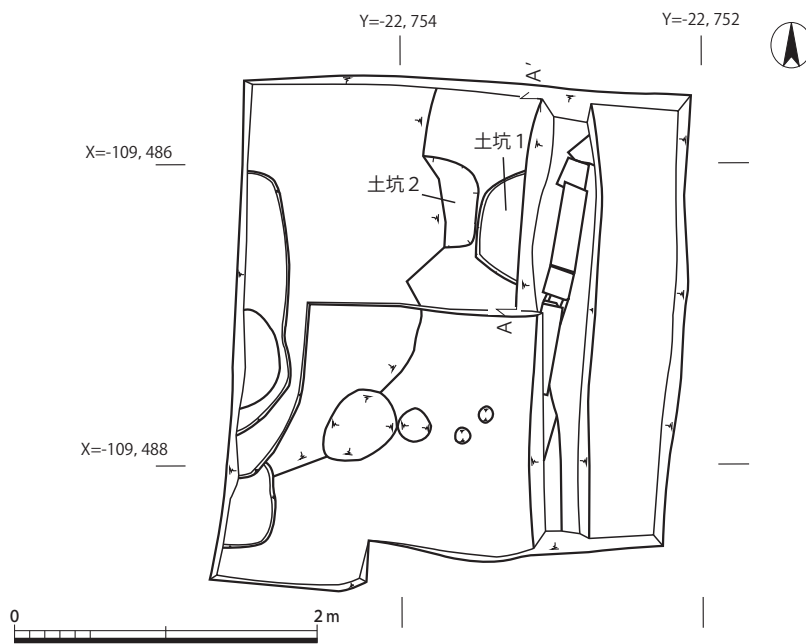
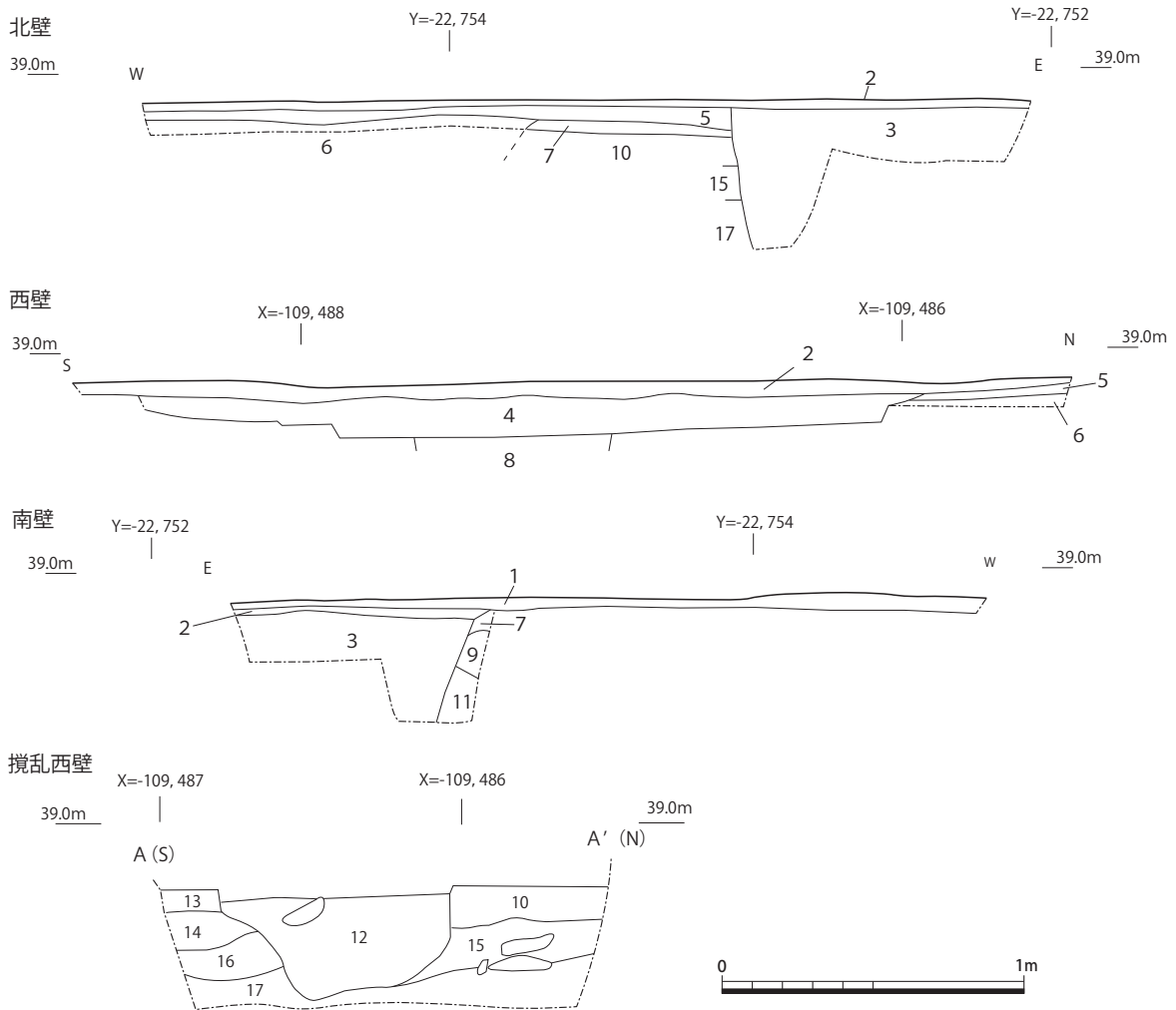


図7 1区平面図 (1 : 50)



- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 N5/0灰色砂利 (砂利おもい施工時) | 10 7.5YR5/3にぶい褐色泥砂 [近代整地層] |
| 2 N6/0灰色砂利 (平成30年電気線施工後舗装) | 11 10YR4/2灰黄褐色泥砂 [近世整地層] |
| 3 5Y4/2灰オリーブ色泥砂 (平成30年電気線埋戻土) | 12 2.5Y4/1黄灰色泥砂 [近代土坑] |
| 4 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (攪乱) | 13 2.5Y6/2灰黄色泥砂 (直径3cmの礫多く含む。近代) |
| 5 5Y5/2灰オリーブ色砂利 | 14 10YR6/6明黄褐色砂泥 (直径3cmの礫含む) |
| 6 7.5Y4/1灰色泥砂 直径3~5cmの小礫多く含む | 15 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (直径10cmの礫含む) |
| 7 10Y5/1灰色砂利 | 16 2.5Y4/1黄灰色泥砂 |
| 8 5Y7/4浅黄色漆喰 | 17 10YR4/4褐色泥砂 |
| 9 5Y5/2灰オリーブ色泥砂 (昭和39年電気線埋戻土) | |

図8 1区断面図 (1:25)

検出遺構 遺構検出は、近代整地層上面で行った。検出した遺構は、土坑2基である。

土坑1は、直径約80cmの円形とみられるが、東半は攪乱により不明である。深さは約0.4mである。

土坑2は、直径約60cmの円形とみられるが、西半は攪乱により不明である。

その他、顕著な遺構や遺物は検出されなかった。

1区の調査の結果、最も浅く近代整地層を検出した場所でGL-9cm (標高38.81m) だった。

また、2区と比べると1区は現代攪乱が多いことが特徴である。電気埋設管を2時期分確認したが、その他にも現代攪乱は複数あり、近代以前の整地層を残す場所は今回の調査区内でも限られた

範囲であった。ただし、近代の土坑を2基検出した意義は大きく、当該地が、東大手門の正面にあたる場所であることから、掘削が繰り返されていた可能性が高い。今回の調査区は限られたものであり、遺構面の確認が主たる目的であったことから、今回明らかにしえなかったが、周辺部を調査すれば、近代、近世の遺構群の広がりが想定できよう。

(2) 2区の調査

基本層序 現代整地層（1・2層）、近代整地層（3～5層）、近世整地層（6層）である。

現代整地層は、厚さ約5cmで砂利舗装である。

近代整地層は、厚さ10cmで3層に細分され、上から暗灰黄色粗砂、灰色泥砂、黄灰色泥砂（直径3～5cmの礫を多量に含む）である。一連の作業によるものであり、礫を含む泥砂層により地盤を形成し、上層2層により舗装面としたものと考えられる。下層ほど礫が多く、上層ほど細かい土で施工している。5層については、礫敷路面である可能性も検討したが、礫が面を揃えているわけ

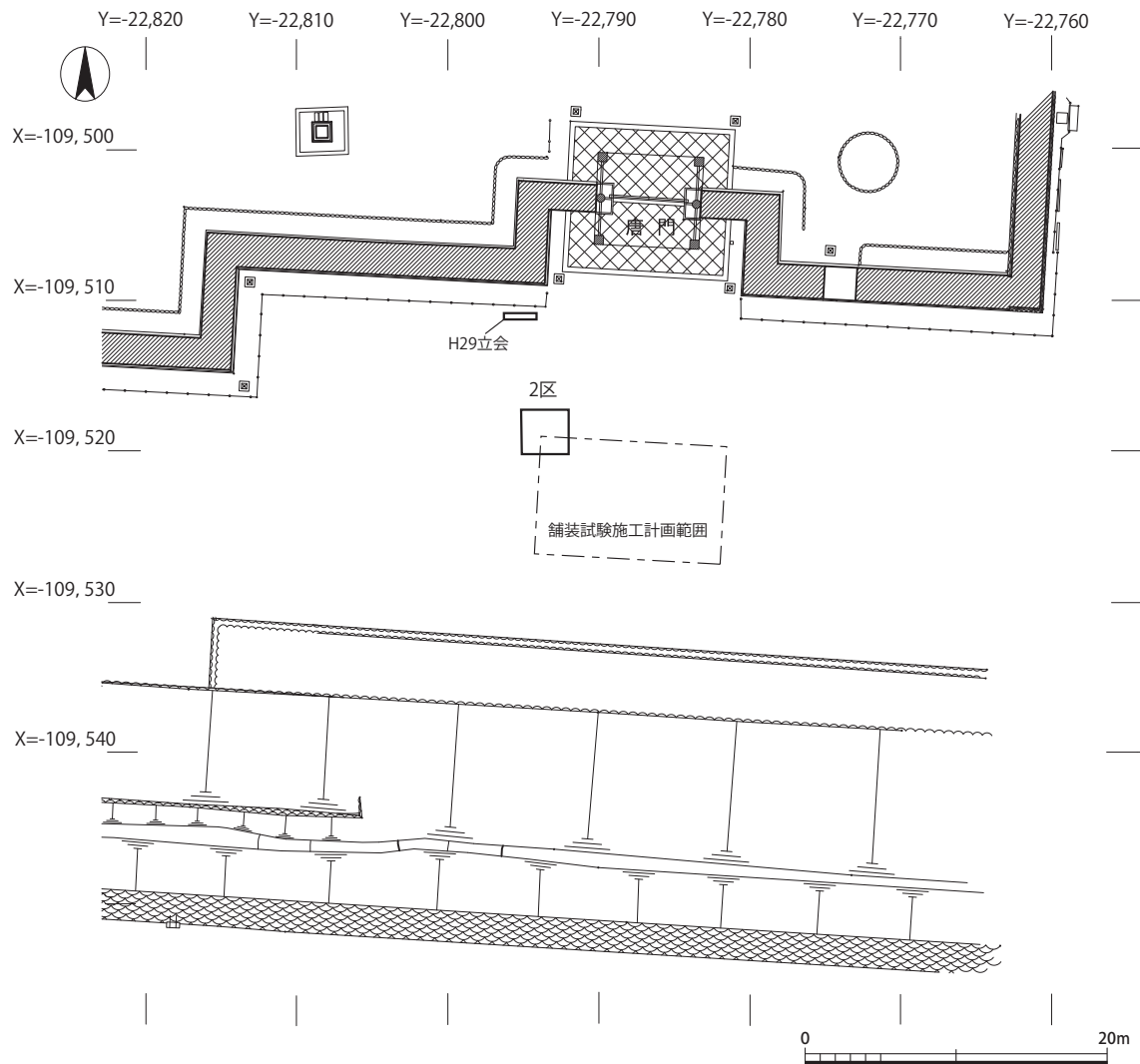


図9 2区配置図（1：500）

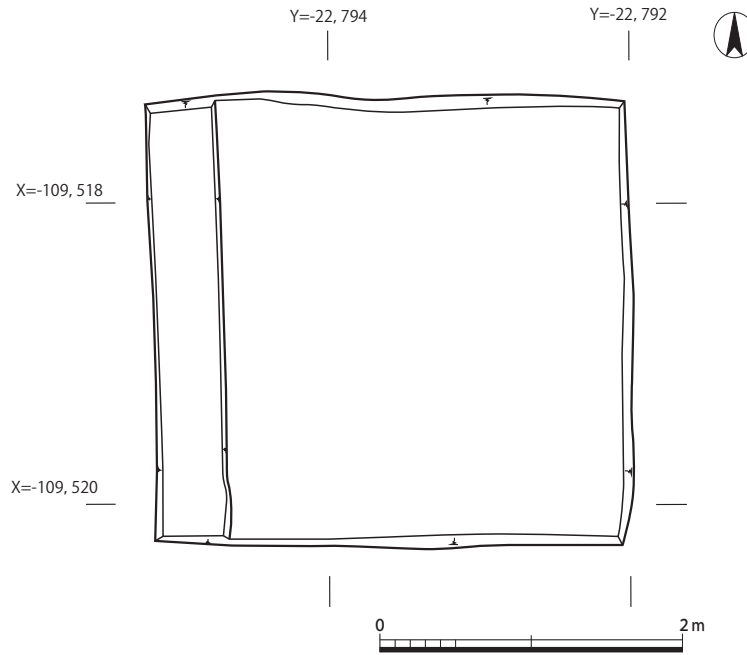


図10 2区平面図 (1:50)

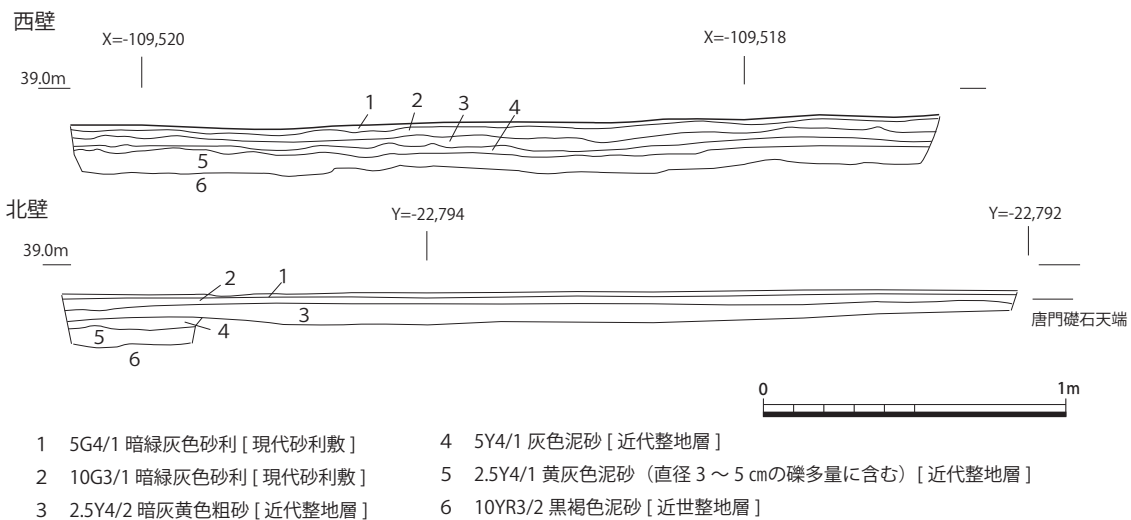


図11 2区段面図 (1:25)

ではないため、舗装の天端というよりも、地盤補強のための路盤最下層であると考えられる。4層上面、3層上面は堅く締まっており、土を入れて叩きしめている。その際に4層の土が5層の礫の隙間に入り込んだ状況を確認することができる。また、3層には礫が含まれず化粧に近い土で丁寧に施工している。

近世整地層は黒褐色泥砂であり、土師器小片を含む。

検出遺構 4層上面で遺構検出を行ったが柱穴などは検出されず、近代舗装のための整地層を確認した。近代舗装の具体的な施工状況を把握できたことが重要な調査成果である。

4. 遺物

出土遺物は、コンテナに1箱ある。多くは1区の掘削中に出土したもので、土師器、陶磁器、瓦、鉄製品である。すべてが小片であり、実測できるもの及び時期を特定できるものはない。

遺構から出土したのは、1区の土坑1から土師器1点と瓦1点、1区近代整地層(13)層から磁器1点、2区近代整地層(5層)から陶器1点、磁器1点、瓦2点、鉄製品(釘)1点である。

5. まとめ

今回の調査の結果、後世の攪乱がない部分では、非常に浅いところで近代の遺構面を検出した。

1区では、後世の攪乱が多かったものの、標高38.81m(GL-9cm)で近代の遺構面を確認し、土坑2基を検出した。現代の砂利舗装が最大4層あり、その直下に近代整地層(遺構面)がある。1区の場合は、大正大礼の際には砂利敷が施されたとみられるが、大正期の砂利敷は削平のため検出されなかった。1区西側にある築地塀基底は標高38.89m、番所礎石が38.84m、1区地表面が38.90m、近代遺構面が38.81mであることから、近世以降地表面の高さはほぼ変わっていないと考えられる。したがって、大正以降、最上層の舗装面を削平しながら砂利等を敷設することを繰り返していたと考えられる。

2区では、最も浅いところで標高38.86m(GL-4cm)で近代の遺構面を検出した。2区は攪乱がなく、1区に比べ非常に残りが良好である。2区で確認した近代の整地層は、大正大礼の際の舗装の可能性が高い。近代の整地層が3層あるが、最下層は栗石を多く含み、上層にいくにしたがい砂質となる。したがって、一連の丁寧な整地作業と考えられ、さらに上層には砂利もしくは栗石により舗装されたものとみられる。北側にある唐門の礎石は標高38.87mであることから、近代の舗装最上層は削平され、その下層の路盤が残存しているものと理解できる。近代以降、砂利敷の敷設替えが繰り返し替えされたと考えられる。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
近現代	土師器, 陶器, 磁器, 瓦, 鉄製品				
合計		1箱	42点(1箱)		

註

- 1 財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』1994年。
- 2 京都市『史跡旧二条離宮（二条城）保存活用計画』2020年。
- 3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011年。
- 4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2009-14, 2009年。
- 5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-15, 2010年。

圖 版



1 1区全景（南西から）



2 1区全景（北東から）



3 1区北半・土坑（東から）



1 2区全景（南西から）



2 2区断割り部（南東から）

報告書抄録

ふりがな	しせききゅうにじょうきゅう(にじょうじょう) へいあんきょうさきょうさんじょうにぼういち・はっちょうあと ほりかわおいけいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	史跡 旧二条離宮(二条城) 平安京左京三条二坊一・八町跡 堀川御池遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	家原圭太							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゅうにじょうきゅう 史跡旧二条離宮 (二条城) へいあんきょうさきょうさんじょう 平安京左京三条 にぼういち・はっちょうあと 二坊一・八町跡 ほりかわおいけいせき 堀川御池遺跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 二条城町	26100	637	35度 00分 46秒	135度 45分 02秒	2021/6/15 ~23	18㎡	舗装
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城) 平安京左京三条 二坊一・八町跡 堀川御池遺跡	史跡	近代	整地層・土坑	土師器・瓦		近代の舗装路盤		

史跡 旧二条離宮（二条城）
平安京左京三条二坊一・八町跡
堀川御池遺跡発掘調査報告書

発行日 2022年3月31日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488
分庁舎地下1階
TEL. (075) 222-3130
印刷 株式会社あおぞら印刷
TEL. (075) 813-3350